

# 天文冬の陣～20年の歩みとこれから～

鈴木 隆之

〈山口大学大学院理工学研究科（理学系）白石研究室〉

e-mail:n003wa@yamaguchi-u.ac.jp



天文冬の陣とは毎年12月に行われる天文をテーマとした学生の全国集会です。天文・天体物理夏の学校とは違い、プロの研究者を志望する学生のみならずアマチュアを含め天文に興味をもつすべての学生を参加対象とします。今年（2009年）で20周年を迎えます。発端は1989年夏、日本流星研究会主催の流星会議に集まった若手・学生メンバーが冬に学生主体の流星イベントを行おうとしたことに始まり、第1回目が大阪だったため、「流星冬の陣」という洒落た名前がつけられました。その後、流星のみならず他の天文の分野を幅広く扱うようになり「天文冬の陣」と改称されました。ここでは冬の陣の20年の歴史と変遷そしてその天文界における役割とこれからについてを表します。

## 1. はじめに

現在私は、宇宙論を専攻する大学院博士後期課程の大学院生ですが、もともとはアマチュア天文の出身で、学部時代はアマチュア天文界の学生交流の世界でいろいろ活動をしておりました。この天文冬の陣にも何度か参加し、分科会座長を務めたこともあります。私自身にとっても思い入れの深いイベントとなっております。昨年の第20回冬の陣に際し、20周年記念誌の作成が決定され、若手OBであり、現役世代ともOBOG世代とも面識のある私はその編集業務を担当することになりました。今回、20年にわたる冬の陣のあゆみを見渡す立場として、天文界の公式な媒体である天文月報に草の根的に続いてきた学生の自主的な活動の記録を残し、その未来を見据えるために筆をとることにしました。

## 2. 冬の陣の歴史～これまでの20年の歩み～

それでは、今年で20周年を迎える「冬の陣」の

これまでの20年についてここに記したいと思います。しかし、私は20年前、幼少の身で、大学生のイベントである冬の陣には当然関与していません。以下に記す文は、多くの先輩諸氏からいただいた「史料」や伝え聞いた「口伝」に基づき綴っています。誤った内容や語弊を招くような要約表現もあるのかもしれませんが、その辺りについては何卒ご容赦いただければと思います。

冬の陣という催しのきっかけは1989年夏にさかのぼります。1989年の夏、8月19日（土）～20日（日）広島にて、日本流星研究会（NMS）主催の第30回流星会議が行われました。その流星会議では若手・学生の参加が多数ありました。参加者の平均年齢は24歳とのこと。そのとき集った若手の有志が

「若手の養成は現在のアマチュア天文界の重要課題であり、この事は大学相互で話し合う必要がある。今回の流星会議で大学間のつながりができたから学生のパワーを集結すれば何かできるはずだ。学生による流星の集いを開くことで、学生のパワーを誇示することができる、若手を育てる

きっかけにもなる。」

のように呼びかけを行いました。そして、冬に学生主体の流星の集いを行うことが決まりました。それとは別に流星会議は初心者の学生にとっては格調が高すぎるから、学生だけで敷居を低くしたイベントを開こうという狙いもあったそうです。主催地は大阪に決定されました。「冬」に「大阪」でやるから「冬の陣」という洒落た名前が与えられ、こうして、その年のクリスマスに大阪市立大学にて「大阪流星冬の陣—大学生による流星の集い」が開催されるに至りました。式次第には、流星関連のOBを招いての講演会、学生有志による観測報告会、パネルディスカッションがあり、パネルディスカッションでは当初の目的どおり、若手の育成についてと大学間のつながりについてが議論されました。当初は定例イベントとして開催を試みたわけではありませんが、大盛況のうちに会を納めることができたため、「またやろう」という話その場で生まれ、北陸の流星観測者の学生が立ち上り、翌1990年冬にも金沢で「金沢流星冬の陣」と称し開催されました。

1991年は広島にて広島大学天文学研究会主催で「学生による流星の集い広島」と称して開催され、1992年は、東京で関東地区の大学天文部の連合組織：大学天文連盟（大天連）が主体となり流星パーティという名前で行われました。この頃から流星会議やNMSの若手ではなく大学天文部がイベントの主体になっていったようです。

第5回の京都開催のときにはすっかり定例イベントとなりました。

この催しは、一つの組織が統一して運営をせず、毎年、その場その場で引き継ぎをしておりましたが徐々に「伝統」と呼べる不文律が形成されて行きました。初めのうちは前述のとおり、毎年、イベント名が変わっていましたが、以後第〇回流星冬の陣で定着しました。瀬戸内、関西、関東の順番で行われ、それぞれ、当該地方の大学天文部の連合団体が主催することも慣例となりました。



図1 金沢流星冬の陣の集合写真.



図2 流星パーティの集合写真.

瀬戸内地方の担当団体は「瀬戸内地区流星観測者会」で、「まる瀬」という愛称をもちます。関西地方にはそれまで地域連合のような団体はなかったようですが、この第5回流星冬の陣がきっかけとなり、翌1994年、関西地方の学生を対象とする天文サークル連合である「関西学生星のネットワーク」が誕生しました。英名は Kansai Students Star Network で、KSSN と略します。関東地方の担当団体は、先述の大天連になります。これは1963年の知床での皆既日食の際に集った大学生有志によって結成されました。行事内容は年ごとに差異はありましたが、招聘講師を招いての講演会と主催地の有志学生による分科会は毎年行われるようになりました。言うまでもなく夜更けには飲み会が行われます。その場では日本各地から地酒が持ち寄られ、「陣」の名に相応しい若さと勢いに任せた盛り上がりぶりを見せたと多数の先輩諸氏より伺っております。

こうして徐々に「伝統」を形成する一方、そこが若者らしさなかわかりませんが、早くもその「伝統」に変化が生じます。流星のイベントとして

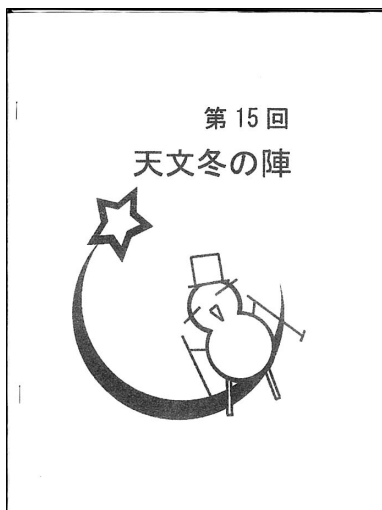


図3 第15回天文冬の陣のしおり.

始められた「流星冬の陣」に流星以外のアマチュア天文の分野が徐々に交じり合うこととなります。六甲における第8回では、プラネタリウム分科会、埼玉での第9回ときは、写真・彗星・太陽・惑星などの分科会も行われました。そしてついに第11回目になって、イベント名から流星という冠詞が取れ、以後単に「冬の陣」と称するようになりました。2000年は、関東開催でしたが、大天連ではなく、東京理科大学の天文部が単独で開催することになります。この年に、大天連が解散するという事態になり、アマチュア天文界の学生交流や冬の陣への大きな打撃となりましたが、何とか単独での開催にこぎ着けたそうです。

2003年、また変革が起こります。この年も関東開催で、東京理科大学の天文部が単独で主催しておりました。そのときの主催幹事が檄文を發しました。

「大天連はなくなり、大学天文部の観測離れが進み、冬の陣が飲み会中心のイベントになった感があるが学生によるアマチュア天文研究会を開きたい」

と言う趣旨のものでした。そして天文のイベントであることを強調して「天文冬の陣」と改称され

ました。

天文冬の陣となって以降も、招待講師による講演会と学生による分科会はほぼ毎年行われました。講演会に招待する講師は流星冬の陣時代にNMSで活躍するサークルOBなどが呼ばれていたのに対し、近年は天文学者やプラネタリアンなどの著名人物も呼ばれるようになってきました。分科会は、主としてアマチュアが対象とする天文のさまざまな分野（流星・彗星・太陽・惑星・変光星・天体写真など）について開かれますが、最近になって宇宙論などプロが研究対象とする分野や宇宙開発・天文普及などに関するものも年によっては行われるようになってきました。開催地は、流星冬の陣時代からの伝統を受け継ぎ、瀬戸内、関西、関東の順番で行われるようになっております。ただ、担当団体は一部変わっており、瀬戸内地方の担当団体は瀬戸内地区流星観測者会から瀬戸内アストロリーグとなり、関東地方は大天連が解散したため関東地方の大学天文部有志がその都度実行委員会を組織し担当しております。

### 3. 第20回冬の陣報告

ここで、昨年（2019年）の第20回冬の陣の報告を記します。

昨年（2019年）の第20回は「今年で20周年だ」と私が主催学生らに呼び掛けたため大々的に行おうと計画段階からさまざまな企画が立案されました。冒頭で紹介した記念誌事業に加え、各種学会の後援を受け、その会誌に参加学生募集の記事を掲載したり、世界天文年のイベントに登録したりと盛り上げようとするさまざまな試みがなされました。記念誌作成は、思った以上に難航しました。軽い気持ちで引き受けてしまったものの、その段階では5年以上前の記録は全く残っていませんでした。創生については元々流星のイベントとして大阪で始まったという「伝説」が唯一の情報でした。ほとんどゼロからの出発でしたが、私は、先輩から先輩へと伝えをたどり、日本全国津々浦々を駆け巡り情報を集める中で、OBOGの皆さまに

表 1 冬の陣過去 20 年の開催記録

回	開催日程		開催 都道府県	会場	主催団体	備考
1	1989年12月24日(日)	～25日(月)	大阪	大阪市立大学	第30回広島流星会議参加の 若手・学生有志による共催	大阪流星冬の陣 ～大学生による流星の集い～として開催
2	1990年12月23日(日)	～24日(月)	石川	石川県青年会館	学生有志による共催	当初は地名+流星冬の陣と呼称
3	1991年12月22日(日)	～23日(月)	東京	八王子セミナーハウス	大学天文連盟	流星パーティーとして開催
4	1992年12月27日(日)	～28日(月)	広島	広島大学	広島大学天文学研究会	
5	1993年12月26日(日)	～27日(月)	京都	京都大学	京都大学天文同好会	第〇回流星冬の陣の名で定着
6	1994年12月27日(火)	～28日(水)	埼玉	加須青年の家	大学天文連盟	
7	1995年12月27日(水)	～28日(木)	岡山	岡山県青年館	瀬戸内地区流星観測者会	
8	1996年12月27日(金)	～28日(土)	兵庫	YMCA 六甲研修センター	関西学生星のネットワーク	
9	1997年12月26日(金)	～27日(土)	埼玉	加須青年の家	大学天文連盟	
10	1998年12月26日(土)	～27日(日)	岡山	牛窓研修センターカリヨンハウス	瀬戸内地区流星観測者会	
11	1999年12月25日(土)	～26日(日)	滋賀	アクティブラザ琵琶	関西学生星のネットワーク	流星以外の分野も扱い 以後単に「冬の陣」と呼称
12	2000年12月24日(日)	～25日(月)	神奈川	藤野芸術の家	東京理科大学天文研究部	
13	2001年12月23日(日)	～24日(月)	岡山	岡山いこいの村	瀬戸内地区流星観測者会	
14	2002年12月22日(日)	～23日(月)	滋賀	アープしが滋賀県青年会館	関西学生星のネットワーク	
15	2003年12月20日(土)	～21日(日)	東京	八王子セミナーハウス	東京理科大学天文研究部	天文の行事であることを強調し さらに「天文冬の陣」と改称する
16	2005年3月12日(土)	～13日(日)	岡山	青少年教育センター閑谷学校	瀬戸内アストロリーグ	天文春の陣として開催
17	2005年12月10日(土)	～11日(日)	滋賀	近江希望ヶ丘ホテル	関西学生星のネットワーク	
18	2006年12月23日(土)	～24日(日)	東京	八王子セミナーハウス	日本大学理工学部天文研究会 東京理科大学天文研究部 東海大学天文学宇宙同好会 三サークルによる共催	プラネタリウムクリエイター 大平貴之氏講演
19	2007年12月08日(土)	～09日(日)	広島	広島青少年スポーツセンター	瀬戸内アストロリーグ	
20	2008年12月26日(金)	～27日(土)	奈良	曾爾青少年自然の家	関西学生星のネットワーク	20周年&世界天文年 イベントとして実施

記念誌への寄稿をお願いして参りました。前章にある情報はすべてそのような苦勞を通して得られたものです。

当時は山形大学の博士前期課程の2年生で、本来なら修士論文に向けた研究に勤しまねばならないこの時期でした。正直なところ本業の学業への妨げになっていたなあと今になって思います。ただ、多方面にわたる天文界で活躍する冬の陣のOBOGの皆さんと面識をもてたことは非常に有

意義なことでありました。

元々が大学天文部ではなく NMS や流星会議参加者の若手が主体であることを知り、NMSを通じて、創成期を知る人物と接触をもつ中で、私はあることに気づいてしまいました。それは「今年(2008年)が20周年ではなく来年(2009年)が20周年である」ということです。よく考えてみれば当たり前ですがこの種のイベントは1回目=0周年ということで20回目=19周年ということにな

ります。それにしても、理論物理専攻にもかかわらずこの程度の算数を忘れて情けない限りです(笑)。記念誌も発刊を引き延ばしにするべきか悩みましたが、すでに20周年を意識したさまざまな企画が決まっておりました。なので、関西の学生スタッフに対して「世界天文年と時期が重なるから2008年は「20周年&世界天文年」のイベント、2009年は「20周年&世界天文年」として連続でお祭り気分盛り上げていけばいいのでは?」とよくわからない科白で言い訳をしました。「鈴木先輩しっかりしてくださいよ～」などと思われたのかはいざ知らず受け容れてもらえたようで、前祝いとして記念誌発刊の準備が進められることになりました。

ただ、残念ながら私は当日現場には赴くことができませんでした。20周年記念誌の編集長という重責を担いながら、その場に参じることができなかったのは何を隠そう、修士論文の発表会が当日行われたからです。流石にこれのために留年するわけにもいかず、ししぶ、すべてを後輩らに託すことにしました。なので私は当日の報告を記すことができないため、以下は、第20回冬の陣の座長兼スタッフを務め、現在KSSNの事務局長をしている近畿大学3回生の山田龍太君の報告文を抜粋になります。

\*\*\*\*\*

26日の13時受付が開始され、冬の陣が始まりました。14時30分からは開会式、15時からは講演会がありました。講演会では神戸大学の向井正先生が「新惑星を見つけよう」という題で講演されました。

夕べの集いと食事・入浴の後19時からは分科会が行われました。KSSNの学生有志が発表者となり参加者全員、希望の分科会に分かれて参加してもらいます。天文・宇宙についてともに考えることができました。関西の学生から全国の学生へさまざまな内容を発信できたことと感じています。

20時からは観望会で広場に望遠鏡を用意して



図4 向井 正先生の講演会「新惑星を見つけよう」。



図5 主催地の学生による分科会。



図6 天文を通じて絆を作る場となる懇親会。

星見会を行いました。みんなでワイワイ話しながら星を眺めました。こういう機会を通して仲間と会話できるのは素晴らしいと思いました。

21時30分から全国の地酒を集めて懇親会を行いました。ビンゴ大会も行いました。大学ごとの地酒紹介は大学の個性が垣間見えて、とても面白



図7 全体集合写真.

く盛り上がりました。

2日目27日、朝の集いの後8時から食堂にて朝食と食べました。このころには、他の大学と打ち解けて各地で談笑している姿が見受けられました。大学間の壁もほぼ取り除けていたと思います。

9時から写真コンテストです。個人有志に写真を持参してもらい、参加者に投票してもらいました。全国天文部の写真技術をこのような形で見る事ができたのは非常に有意義であったと思います。

11時から閉会式では世界天文年PRが行われました。世界天文年の成功にはアマチュアの協力が必要であり、学生主体で何か天文普及活動をやってみようと思志が呼びかけました。ちなみに私たちKSSNも今年から一般向けの普及活動を始め、平成21年8月、四天王寺で行われた「七夕のゆうべ」の観望会にも協力をして参りました。

閉会式後、解散する前に、全体集合写真撮影を行いました。

1年に1度の全国の天文を愛する学生が集まるこの天文冬の陣。その重要性を改めて肌で感じる事ができました。この集まりを通し全国の天文交流がより活発になれば良いと思います。今後も、この集まりが続いていくことを願っています。

\*\*\*\*\*

当日の盛り上がり様子は、他の参加者よりも伝え聞いております。参加者数は173人、過去最多を記録しました。昨年の冬の陣は学生による世界天文年キックオフイベントという趣旨もありました。二日目に行われた世界天文年PRを見て、啓発されたという声も聞いています。

今年の冬の陣は学生による世界天文年グランドフィナーレとして行います。世界天文年日本委員会委員長の海部宣男先生の招待講演や世界天文年に際して行われた、学生主体の天文普及活動の報告会を兼ねたパネルディスカッションが予定されています。最近では研究的な観測ではなく天文教育や天文普及の活動に励むアマチュアの学生も多いようですが、学生だからこそできるような斬新な活動報告がないかと今から期待しています。

修了が危ぶまれた私の進路については、要領をよく二つのことをこなす才があったのかよくわかりませんが？無事修士論文を提出、さらには山口大学の博士後期課程の試験にも合格することもできました。つまりは北の山大から南の山大へ進学したということです。

#### 4. 冬の陣の開催意義とは～これからの20年を見通して～

さて、これまでの冬の陣の歴史について紹介してまいりましたが、改めて冬の陣の開催意義について考えてみたいと思います。当初の目的は「学生による流星会議を開こう」と言うものでしたが、時代を経るごとにイベントは変質してまいりました。おそらく、時代の流れとともに変わっていったということでしょう。今の時代において「冬の陣」が天文界においてどのような役割を果たすのか、私なりに考えました。主に二つあると思われる。

まず、一つ目は「アマチュア向けの夏の学校」という役割です。

もともとアマチュア流星観測者の若手イベントとして始まった「冬の陣」、今では他の天文分野を広く扱うようになっておりますが、主たる参加者はプロの天文学者を志望する学生ではなくアマチュアとして活動をしている学生です。一般にアマチュアという言葉はプロと対をなす言葉で、プロが本職として業をなすことに対し、アマチュアは本職ではなく趣味としてそれを行うことを意味し、時にプロより格下の存在と見なされてしまうものかもしれません。しかし、天文の世界において、アマチュアが重要な役割を担っていることは皆さまご周知のとおりかと思われます。日本において天文学は近代科学として西洋より伝わって以来ずっとアマチュアの参加・貢献が顕著な学問であり、在野の天文観測者として活躍する人物も多く見受けられます。この天文月報を読まれている方の中にもそんなアマチュアの方が何人かいらっしゃるのではないのでしょうか。太陽系内の天体（流星・彗星・惑星・小惑星等）の可視光による観測などはむしろプロよりもアマチュアが主力だと思われます。また、近年は研究的な観測ではなく草の根的な天文教育や天文普及の活動という点でのアマチュアの役割も注目されています。

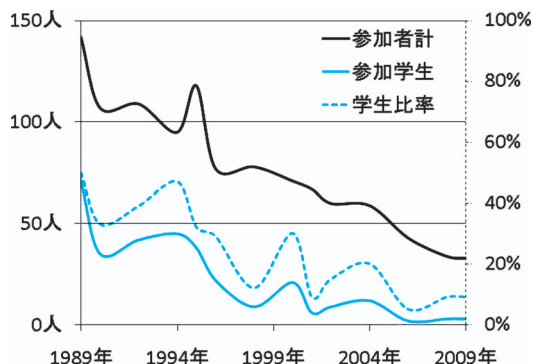


図8 流星会議の参加者の変遷と学生の割合。かつては、半数近くを学生が占めていた流星会議も近年、学生参加率が減少し、参加者総数も減っている。

そのアマチュア天文の世界は若手不足に悩んでいるとの声をあちらこちらから耳にします。プロの天文を目指す人は多すぎて困っているようですが、(余剰博士問題をそのように表現するのが適切かわかりませんが…) アマチュアの世界では逆の様相をみせているようです。世界天文年2009日本委員会主催で、昨年12月に国立天文台で行われた全国のアマチュア天文同好会を対象とした交流集会「天文同好会サミット」においてもそのことは話題に上りました。全国の同好会において若手の新入会員が現れないため、世代交代がうまく進まないそうです。また、冬の陣の母体となった流星会議もかつては半数近くの参加者が学生だった年もありましたが、今となっては若手学生の参加が1割にも満たない年もあります。

現在の状況下において冬の陣は若手アマチュアを啓発し、その全国的な交流を活性化するイベントとしての重要な役割を担うであろうと考えられます。すなわちプロ志願者の「夏の学校」、に対しアマチュアの「冬の陣」があると。

さて、冬の陣の役割はそれだけにとどまらないと思われます。冬の陣の参加はアマチュアを主体とすると述べましたがプロ志願の人がいないわけではなくハイアマチュア志向の人に対象を限定せず、単なる星見が好きの人から、天文学者志望、プ

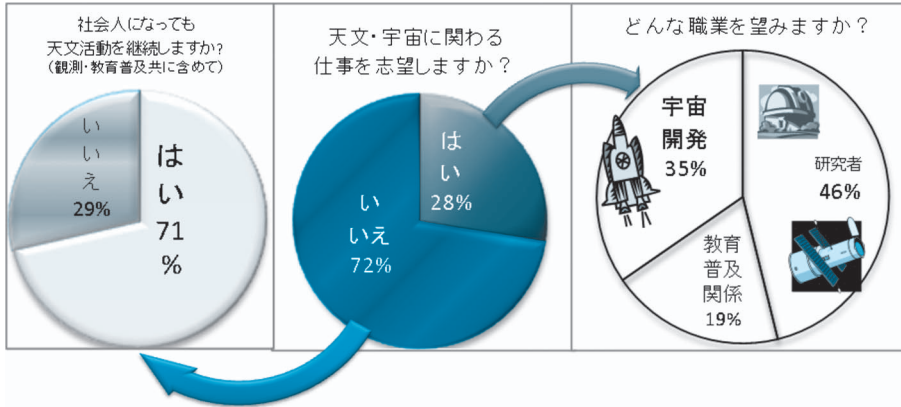


図9 第20回冬の陣参加者へのアンケート結果。多くの人が天文は趣味にとどめるとしつつも、本職にしたいと志望する学生もいる。その希望進路は多岐にわたり、また趣味にとどめるとする学生も生涯を通じて、アマチュアとして活動をしたいとする声が多い。

ラネタリアン志望も含め「天文・宇宙に興味がある学生なら誰でも参加可能」と門戸を開いて行われています。事実この20年の中で多方面にわたる天文の道に進んだ先輩を幾人か輩出しております。

そのようにしてしまうと、目的がぼやけてしまうのではないかとこの声もあがるかもしれませんが、私はむしろ、そうすることによって別の役割が生まれてきているのではないかと考えております。

二つ目の役割は「天文というテーマで垣根を越えた広い交流を築き上げる場」というものです。

天文・宇宙への携わる立場として 研究者、教育普及、宇宙開発、アマチュア…いろいろな携わり方があり、それぞれ大切な役割を担っていますが交流を行うにしても同じ階層の中で閉じた形で行われていないように思われます。天文・宇宙に関連する学生の全国集会はいろいろありますが、「天文・天体物理若手夏の学校」は研究をしている大学院生を対象にし、「宇宙開発フォーラム(SDF)」は宇宙開発の分野で活動をしている学生のみを対象としています。もちろん、確固たる目的があってこそ対象を絞っているのであり、それはそれで大切な役割を担っているのでしょう。

しかしながら、これらとは別に進路が分化する前の若者同士が天文というテーマで垣根を越えて

いろいろな人と知的交流のできる場を提供するというのも必要であり、その役割を担うのが冬の陣ではないかと私は思います。

参考までに、「冬の陣20周年記念誌」に寄稿をいただいた第5回流星冬の陣参加者で現在、飛騨天文台で助教をされている上野 悟氏の文を一部抜粋し紹介させていただきます。

「思い返すと、この冬の陣は、プロの天文研究者を目指す・目指さないにかかわらず、元来趣味として天文を愛好している若者の貴重な集いであったわけですが、現在私もその片隅に身を置いている、プロの天文学界においても、この冬の陣に携わっておられた方々は、各専門分野において、誰もがその名前を知っているほど活躍をされてきている人ばかりだと思います。おそらく、天文学界に進まれなかった方々におかれても、アマチュアとして、各地で顕著な活動をされ続けているに違いありません。

常々、プロの天文学界とアマチュアコミュニティー、さらに教育機関などとの間の有機的な交流や、その結果としての天文文化の日本社会への目に見える形での普及浸透が課題となっている昨今、このような社会人として各方面に分かれていく前段階の若手天文愛好家が全国規模で集う会合



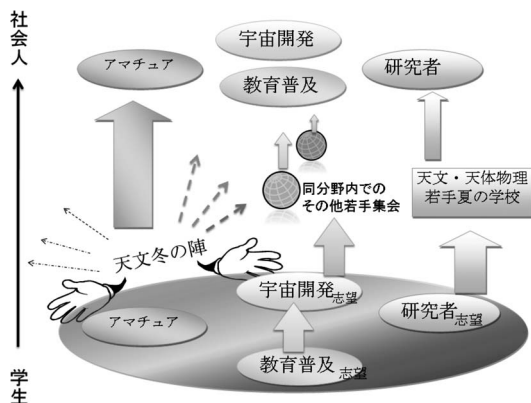


図 10 冬の陣の役割とは、冬の陣には、アマチュアを中心としつつも、さまざまな進路を目指す天文・宇宙を愛する若者が集う。プロの研究者を目指す若手の学術発表会である夏の学校に対して、広く学生を集め知的交流を行う冬の陣にはそれとは別の確固たる存在意義があると考えられる。

の存在は、極めて重要であるはずですが。現在は流星だけでなく、天文一般にその対象を広げられたと言うことも、そのような観点からたいへん有効な方向性だと思います。是非、今後も多方面の天文を愛好する若者が、広く強い連携を築ききっかけとして、当天文冬の陣がますます継続・発展されることをお祈りいたします。

このたびは20周年、誠にありがとうございます。」現在の冬の陣の役割、私が分析するに以上二つあると思います。

しかしこれは、飽くまで、「現在の」冬の陣についてです。

冬の陣は時の学生の若さと勢いに任せて続くイベントです。もとは流星のイベントとして始まり、アマチュア天文の他の分野を取り込み、最近ではプロが研究対象とする天文学の分野や宇宙開発・天文普及についても扱われるようになりました。今後どのようなイベントに変化するかわかりません。ただ、時代の流れに見合った天文界の若手イベントとして継承されると私は信じています。冬の陣の一番の価値というのは若手・学生だけで運営し、これほどの規模のイベントを20年

継承し続けてきたことだと思います。

天文学会の皆さま、これからも、若き天文人の自主的な活動を温かく見守っていただけるとありがたいと思います。

## 謝辞

この文を書くにあたり、第20回冬の陣の開催報告を記したKSSN事務局長の山田龍太君と20周年記念誌の寄稿文の一部抜粋を許諾いただいた飛騨天文台の上野 悟氏に御礼を申し上げます。

そして何より、このような文章を書くことができたのは、「冬の陣」というイベントが20年間続けられたからであります。

「冬の陣」に携わったあらゆる方々に感謝の意を表します。

## 参考文献

天文冬の陣に関する公式に出版された媒体での参考文献は存在しません。20年間草の根的に続いていたイベントです。おそらく公式な媒体としてまとめられるのは本寄稿が初めてだと思います。この文章は「冬の陣」に携わった多くのOBOG諸氏や現役学生の証言や私個人の見聞に基づき記しました。

### The Winter Battle of Astronomy: Temmon-Fuyu-no-Jin Takayuki SUZUKI

The chief editor of The Winter Battle of Astronomy 20th Anniversary Memorial Book Yamaguchi University, 1677-1, Yoshida, Yamaguchi-shi, Yamaguchi 753-8512, Japan

Abstract: The Winter Battle of Astronomy is a nationwide meeting of amateur astronomy for students. This meeting greets the 20th anniversary this year 2009. It was named after Japanese historical battle "The Winter Battle of Osaka (=Osaka Fuyu-no-Jin)".

This paper consists of

- history of this event
- report of "the 20th Winter Battle of Astronomy" (it was held last year)
- the significance of the event in astronomical world.